

里村雄彦会員のご逝去を悼む

里村雄彦会員は、2014年3月3日、享年60歳にて永眠されました。京都大学大学院理学研究科教授の要職にあり、今後の更なるご活躍が期待されていただけに、誠に悲しく、残念でなりません。

里村会員は、1953年大阪府に生まれ、1972年京都大学理学部に入学、同学部を卒業後は東京大学大学院理学系研究科に進学されました。博士の学位取得後1982年に気象庁に入庁され、高松地方気象台予報課、気象研究所応用気象研究部に勤務されました。その間、フランス気象研究センター客員研究員、フランス国立科学研究所客員研究員、筑波大学地球科学系連携併任助教授、国立環境研究所客員研究員も務められています。1995年9月に京都大学大学院理学研究科助教授に異動され、2007年3月教授に昇任された後は同研究科地球惑星科学専攻大気圏物理学講座を担当していました。

日本気象学会では、第28期、33期、34期、35期、37期の5期にわたり理事又は常任理事を務められ、電子レター誌「SOLA」の立ち上げと編集委員長、電子情報委員長、機関誌「天気」の編集等で学会に大きく貢献されました。学内では理学研究科地球惑星科学専攻長などとして大学運営にも貢献され、また学外でも(独法)大学評価・学位授与機構理学専門委員会物理学・地学系部会委員などとして我が国の高等教育の発展にも尽力されました。

里村さん(1年後輩の仲間として長くお付き合いいただいたので、こう呼ぶのをお許し下さい)は京都大学理学部の1年先輩でしたが、知遇を得たのは大学院に入ってからでした。当時は大学院生数が今ほど多くなく、東大や京大、九大の気象力学分野の院生を合わせても各学年数人程度であり、ほとんどが顔なじみでした。里村さんは、大学院入学当時は惑星大気の研究志望で、純粋力学理論家であり、学位論文の主題は浅水流におけるシア不安定でした。里村さんの問題設定と線形安定性解析は、その後、波の過剰反射とシア不安定の関係や、波の共鳴による不安定の理解等に関する理論研究へと繋がっていきました。



気象研究所に移られた後はメソスケールの数値モデル開発と数値実験を中心に研究を進められました。フランスでの2度にわたる在外研究では、ピレネー山脈フィールド観測プロジェクト(PYREX)などにも関わられ、山岳波の励起と伝播など複雑な表面地形の影響を領域大気モデルで正確に表現する研究を推進されました。この研究の流れは、山岳波の碎波に伴う大気重力波の二次生成の数値実験などを経て、最近では、急峻な地形でも流れをより正確に表現できる新解法(カットセル法、結合直交格子など)による非静力学モデルの開発へと発展してきました。コンピュータ性能が飛躍的に向上を続けている今、これからの領域モデルの中心的手法になると期待される新技術の開発です。非静力学領域大気モデルによる急峻地形効果の研究は、里村さんのライフワークとなりました。

京都大学に移られた頃、ちょうど全球エネルギー・水循環観測計画(GEWEX)のアジアモンスーンエネルギー・水循環観測研究計画(GAME)が始まり、里村さんはGAME-熱帯計画の主要メンバーの一人として、熱帯のモンスーンと水循環に関する国際共同研究に深く関わられることとなりました。とくに、モンスーンの影響を強く受けた東南アジア域での対流性メソ擾乱に関する研究、および同地域を中心としたさまざまな時間空間スケールでの熱帯擾乱・変動の研究

で顕著な業績をあげられました。また、インドシナ半島域を中心とした降水観測システムの基盤整備や人材育成にも尽力されました。2013年8月には、ベトナム水文気象局を通じた水文気象学・水文気候学分野の研究による多大な貢献に対して、ベトナム天然資源環境省より表彰状とメダルが授与されました。本記事の遺影は沖大幹東京大学教授からご提供いただいたものですが、2005年7月にタイのカセサート大学と一緒に訪問された時のスナップ写真だそうです。普段の里村さんの表情がよくとらえられているので使わせていただきました。

インドシナ半島での降水日変化に関しては、夕方に山岳地域で励起される組織だった降水システムがスコールラインとして東方へ移動するという時間遅れのメカニズムを2000年の論文で世界に先駆けて提示されました。また、北西バングラデシュでの降水日変化に関する数値シミュレーションを行う一方で、インドシナ中部域でのレーダーエコー領域の日変化の解析を行い、新知見を次々と発表されました。国ごとにレーダーの機種やデータフォーマットが違うので統合したデータ解析が難しいこと、それを乗り越えた国際的なレーダー観測データの交換が重要であること、などのお話を伺ったのも昨日のこのように思い出します。

また、熱帯域の積雲対流活動の伝播と重力波応答に関する数値実験や、さらには、インド洋ダイポールモードと結びついた季節内変動の年々変動、ベンガル湾のメソスケール対流システムの南方伝播の季節変動、東南アジア域・ベンガル湾域の季節内変動などの再解析データを用いた優れた現象論的研究を展開されました。これらは大学院生の研究指導のなかで得られた成果でもあります。京大在職中に6件の博士論文、29件の修士論文を指導されました。また、タイやミャンマーからの院生、研修生を受け入れて、国際的な研究者育成、人材育成にも尽力されました。

指導された博士論文の中には、火星大気大循環モデルの開発とダストの拡大地域特性に関する研究もあります。惑星大気は院生時代からの興味対象であり、火星表面の地形が重要な役割を果たすという里村さんにふさわしい研究指導テーマですが、その教育方針は学生の自主性を重視するものでした。大学の教育研究活動データベースには、「教育に関しては、本人の希望

をできるだけ尊重すること、自分で問題を発見し解決方法を勉強しながら模索する習慣を身につけさせることにより研究能力を高めることを目指している」と記されています。

この度、里村さんが東京大学大学院および気象研究所に在学・在職されたころのプライベートなお話も多くの方から伺いました。テニスのスタイル、ドライブのテクニック、そして、お酒の飲み振りなどなど。私自身も、三条大橋西詰の日本酒・焼酎の銘柄が揃うお店で研究室の飲み会に飛び入り参加させてもらったことや、里村さんの運転で宇治の防災研から北白川の理学部まで乗せてもらい道すがらあれこれお話をしたことなど、いろいろと思い出されます。

残されたホームページには「…ここ数年は熱帯のモンスーンと水循環に関し、モデル開発および数値シミュレーションを主体にやっていたと思っています。もちろんモデルだけでは話しが済みませんので、観測やデータ解析も同時に行います。以前はタイのドップラーレーダー観測・解析だけだったのが、2003年から西はミャンマーやバングラデシュから東はベトナムまでのインドシナ半島全体+ α に雨量計展開をしつつあり、対象と手法が拡大し始めました。2009年からは、インドシナ半島ほぼ全域をカバーできるレーダー群をバーチャルにネットワーク化し、半島規模での降水活動を調べようとしています。それぞれ、どんな意外な現象が捕まえられるか楽しみです。」とあります。

これが書かれたのは何年前か前でしょうか、熱帯のモンスーンと水循環に関して、数値モデル開発・実験から観測、データ解析まで、総合的に研究を展開しているという決意が述べられています。新たな現象の発見をはじめとして、研究に教育にまだまだやりたいことが山積していたことでしょうか。志半ばにして断念せざるをえなかった無念の胸中を思うと、言葉が見つかりません。残された教え子たちや我々同僚が里村さんの遺志を継ぎ、熱帯気象学の発展と人材育成に尽力していきたいと思います。これまで長年にわたるお付き合いに深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り致します。

(京都大学大学院理学研究科 余田成男)